

（健康のまち行動計画策定にむけて）

「ウエルネス・アクションつる」その5

都留文科大学県民コミュニティーカレッジ

—公開講座の様子—



「都留市のまちづくり」 —市長、学長、学生、職員そして 主役の市民がともに学んだ六日間—

都留文科大学公開講座、県民コ
ミュニティーカレッジが十一、十二
月にかけて、六回行われました。
「都留市の地域づくり、まちづく
りを考える、そしてデザインする」
をテーマに、ミュージアム都留の
研修室で、約三十人の受講者が学
びました。産業、健康、大学、行
政など、様々な角度から都留市の
まちづくりについて、講義あり、
討議あり、そして最終日には都留

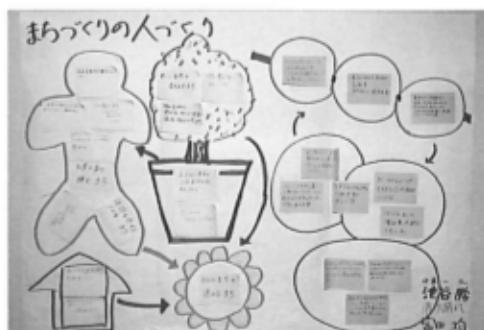


グループ内で、自分達の意見を出し合いました

まずは、各自、思い思いの夢・願いを紙に書きました。「人が集まるまち、古いものを大切にするまち、小さい子どもが枯れ葉で遊べるまち、みんなが落ちていないうまち、みんなが自立心を持ち、それでいて相手の立場を思いやれる人が住むまち、あいさつと笑顔のあるまち、学生が好きと言えるまち、子どもが戻ってきたいまち（故郷）」など。

文科大学中村陽一助教授の進行のもと、グループごとに「都留市の夢」を自分達で創作してみました。この公開講座もウエルネス・アクションつるの取り組みを題材として学び、意見交換が活発に行われました。グループの話し合いの様子を紹介します。

次に、具体的な改革の希望、提案を出し合いました。「いつでも人がゴチャゴチャと集まれる場所がある。育成会などで子ども達の力を生かした取り組みをする。広くのびのびとした公園。お城山に頂上まで桜の木を植える。手の加えていない自然を残す。市民と学生の交流。一人ひとりが相手を思いやる。ローカルマネー活用」など白いポスターはみんなの意見でいっぱいになりました。



各グループごと、まちづくりに対する意見をポスターにまとめました

40代男性 建築士

健

康なまちづくりの一環として
地域社会の健康を考えたとき、地
域に対する愛着、住みやすさとい
った住民の生活意識や社会・福祉

活動への参加、また、NPO、市
民グループといった住民活動の組
織化が必要となっている。

今回の講座を通して、改めてま
ちづくりの重要性が認識され、学
生を含めた各年代層の人たちとの
意見交換は大変有意義であった。

これからは、ネットワークを拡
げ、希望の持てる、ひらがなの
「まちづくり」に参画していくこうと
思う。

40代女性 主婦

都留文科大学は、今までの私の
イメージをはるかに越え、「地域
を考える大学」に成長していた。
これが公開講座に参加した感想で
した。

第一線で活躍している講師の方々のお話を直接聞くことができ、毎回興味深いテーマや、新しい情報など、この講座を通じて、大学のすばらしさに気がつき、この大学がある都留市に生活していることを、とても、誇りに思いました。これからも、市民が参加できる公開講座、セミナーなどの企画を楽しみにしています。

2000年は夢実現に向かって

地方分権時代となる2000年を迎え、市民一人ひとりの小さな力が一つとなり、大きな力に変わると、都留市の夢は叶います。その小さな力が今、少しずつ、それでいて、確かにここにある実感。皆さんの力で夢が理想でなく、現実となりえるのです。

これからは、市民の皆さん、あなたが主役です。ご意見お待ちしています。